

會員の聲

▼時下新緑の候、御會幹部の皆様益々元氣旺盛清新の英氣を以て社會淨化のため御奮闘下さる事を感謝致して居ります。かねて聞き及び居りますが、幹部の方々には別に何等の報酬とはなく唯各位御本職の傍ら此の續會の爲に、即ち時代認識の先覺として御奮闘下さつて居ることは、私共萬腔の敬意と謝恩とを感ずるものであります。宜なる哉、毅然として僅二年にして抜くべからざる大續會となり雜誌淨土は愈々洗練され内容も次第に充實しまして、淨土主義を鮮明する直路として一大偉力たるを疑はないものであります。然し雜誌の表紙がどうも淨土宗風を適當に顯はしてない様に思はれます、是は言ふべくして仲々六ヶ敷い問題と思ひますが、宗風を表現して然も時代認識に投じたものに一時も早く實現を希望致します。此の宗風を現す事、特に淨土宗風なる幾百年來の美風を表顯する事は最も大切な事と思ひます。表紙にある「淨土」の字は宗風をよく現して居りますが、此の

「淨土」の字と相伴ふのが必要ではないかと思ふのであります。次に私は淨土初號より一頁も餘さず讀破して居りますが、中に於て中村辨康師の一枚起請文、又唯今の一紙小消息の御講義は悉く師の深き體驗より進出たるものであり、又其の宗學としても實に秩序ある理解の上に御苦辛を嘗められたる事を察し得られるものであります。師の御講義は最も宗義として正しく然も誰にも容易に判る言葉を以て雄辯に語られてゐる事を思ふのであります。私はひそかに會心の喜びを感ずる者であります。多數會員の内には私と同感の方も多々お在りの事と思ひますが、どうか師の御講義は再三味讀してこの有難い生きた如實の言を味はれん事を訴ふるものであります。感嘆のまゝに書き綴りました(廣島市・源光院支部會員・津野麟三)

▼答：本會に對する深い御理解と御支援の御言葉は一言一言本部員の胸を打ち感激にをのゝかせました。かゝる會員があればこそ、本會も今日の隆盛を築く事が出来たのです。何卒今後とも御支援御教導の事を切にお願ひ申上げます。尙表紙に就ては貴説の如く本部にても種々苦心を重ねてゐま

すが、本會に相應しいものが未だ得られず皆々様に申譯ないと存じてゐます。今後會員の方々と協力して立派なものを作りたいと念願してゐます。

▼本日六月號をお送附頂きまして未だ内容は拜見致しませんが、表紙を見た瞬間に何かハツト清新な氣に打たれました。きつと中には私の心を打つ記事があるに違ひないと言ふ感じでした。何時も表紙には御苦心の由、感謝してをります。尙私等在俗の女性が如何なる困難にあつても屈しない力、圓満な人格の完成に鞭打つて下さるやうな記事を切望します。(東京・土屋千鶴子)

▼答：六月號の表紙を、お賞めに預り、編輯部一同喜んでゐます。尙御希望の如き記事は編輯部でも絶えず求めてゐるもので、精々努力して必ず掲載致す考へです。

▼家内中待ちに待つて居りました「淨土」六月號、懐しく拜見致しました。五月號は子供から、お父ちゃん今月はウスイね、來月(六月號)になつたらもつと薄くなるかも知れないね、と言はれた時私は心細くなりました。私は、今月はそれお山(知恩院)で三上人様の御遠忌で忙がしいからよ、と

申しておきましたが、若し今月號(六月號)が薄くて出來が、などと思つて大變心配を致して居りました。子供にはウソが申されませんから。ところが本日大變に出來のよい六月號を受取りまして私はホツト致しました。これで子供への申譯もたつて嬉しく存じてゐます。編輯の方には厚く大阪の空より御禮申上げます。次に私の希望を二三申上げますと、會員の方々へ、會員一人に新しく友人一人を會員に入れては如何がです。せめてよき教の報恩のつもりで、編輯について、(一)農村に行き亘つてゐる「家の光」は大變に安く(二十錢)世の爲になつて居ります。出來るだけ「淨土」も面白く編輯して下さい。(二)寫眞や繪を多く入れて下さい。繪や寫眞が多くありますと大變に楽しみ易く、暖いやうに存じます。讀み難い固い處は特別にお願ひ申上げます。信仰相談欄に就て、六月號の養子として云々の處で、「單に個人的關係ばかりでなく社會的國家的な廣い關係を考へ、人間本來の使命云々」は誠に有難く拜讀致しました。(大阪・中易善三郎)

▼答は頁の都合で略します。

高僧 道重上人の苦學時代

實話

線香の明りで

道重大僧正は長門國厚狹郡宇部村、即ち現在山口縣宇部市の農家に、安政三年呱呱の聲をあげたのである。幼名を辰之助と云ひ、明治元年十三歳の夏、同村の菩提寺松月庵（現松月院）に弟子入りし、師僧小田信立師から一字頂戴して名を信教と改めたのである。この信立師の門下に對する訓育振りは、嚴格と云ふより寧ろ峻烈極まりないものであつた。その上當時の松月庵はお話にならぬほどの貧乏寺だつた。

師僧は夜分一切の火の氣を禁じてゐた。これは子僧達の油斷からの火事を怖れた點もあつたが、それよりも行燈に用ゐる菜種油を満足に買へなかつたためである。晝間は絶えず

檀用や雑務に追はれる、夜は燈火に親しむわけに行かない、従つて弟子達は經文を覺えるためには、ひそかに線香の明りを用ゐたり、月夜のときは本堂の縁側で月の明りで勉強した。

寒中、足袋・頸巻の使用は勿論、縫入の衣服や外出の折の帽子の使用も許されなかつた。寝るには煎餅蒲團が一枚きり、それを二つ折にしてその間にもぐり込むだけだ。朝は三時四時に叩き起され、硝子のやうに張り詰めた氷を破つて水仕事、本堂から庫裡まで拭掃除する、そして凍てついた田畑の耕しにまで追ひやられる。だから手足は紫色に腫れ上つて人前に出せないやうになつてしまふ。

食事の麥飯はめづらしくないが、それも毎日炊くと薪が損になるといふので三日分を一

度炊く。冬は凍みた飯ばかりを食べ、夏はぬるぬる腐敗して惡臭鼻を衝く飯を食べなければならぬ。副食物は鹽がお極り、偶に梅干の二つも與へられ、ば馳走である。師僧のお伴で檀家に行けばもつとご馳走が出る。しかしそのご馳走は膳の上で見ればかりで、御飯だけは食ふことを許されるが、油揚げや香の物に至るまで、師僧の分と一緒に紙に包んで持ち歸り、山海の珍味として寺中で幾日も分けてこれを食ふ、また寺へ參詣の檀徒にも差上げる習慣である。

が、かうした修行も新入りの弟子信教には苦にならなかつた。彼はこの師僧の感化によつて、苟くも僧たる者は物を粗末にしてはならぬといふことをまづ學びとつたのである。たゞ向學心に燃え立つ信教にとつて最大の苦痛は、經典に含まれる多くの難解の字句を穿鑿するのに寺に字典一冊もないことであつた。それらはすべて師僧の口授にのみ頼らなければならぬ。しかもその口授の機會の少ないことであつた。

佛ほとけの歡喜くわんぎに應同おうどうするもの

— 小消息講義 — (其六)

中 村 辨 康

三佛さんぶつの推挽すゐばんと歡喜くわんぎ

阿彌陀佛あみだぶつは不取正覺ふしゆしあうかくの詞ことばを成就じやうじゆして、現げんに彼かの國くにに在ましませば、定さだめて命終いのちをはらん時ときには來迎らいかうし給たまはんずらん。釋尊しやくそんは、よき哉かなや、我わが教をくに従したがひて生死しやうじを離はなれんとすと智見ちけんし給たまふらん。六方諸佛はうしよぶつは、悦よろこばしき哉かな、我等われらが證誠しやうじやうを信しんじて、不退ふたいの淨土じやうどに往生わうじやうせんとすと喜よろこび給たまふらん。 (和語燈錄) 【法語抄五一】

現げん在さい說せつ法ぽふの佛ほとけ

第十八せいいちはちの本願ほんぐんは「王本願わうほんぐん」とも云いはれる位くらゐに、四十八箇條しかでうある本願中ほんぐんちゆうでも一番中心ばんちゆうしんをなすもので、淨土じやうど宗しゆう、眞宗しんしゆう、西山せいざん、時宗等じしゆうとうの淨土教系じやうどけいの諸宗しよしゆうは皆此第十八願みなこのだいじゅうはちぐんに依よつて成立なりたつて居ゐると云いつて差支さしつかへない程ほど、重ちゆう

本願ほんぐんの完成くわんせいと
救きうひの成就じやうじゆ

信仰の領域

要なものです。即ち

「私が阿彌陀佛となる事が出来るならば、何んな人でも、私と私の浄土とを信じ樂つて、私の世界に生れようと欲ひ、たとひ十度一度と云ふ最少限の念佛であらうとも、それが誠のこともつた至心のものである限り、屹度其念願は契へられるであらう。若しさうでなかつたならば、正覺を得てもそれを完成することなく、佛とはなるまい」と云ふのが夫れであります。

そして其大きな誓ひは實現され、其他の四十七條の誓ひも實現されたので、單に一法藏菩薩でしかなかつた身が、遂に阿彌陀を完成し、阿彌陀夫れ自體となつて、現に十方衆生の上に光と法とを伸べて居られるのであります。

それがまた「十方遍照」であり「現在說法」であるところの「阿彌陀」のはたらきでもあります。かう云ふと或は

「自分には阿彌陀の光などちつとも見えない。そして阿彌陀の說法などちつとも聞えない。またよしんばその光が見え、その言葉が聞かれたとしても、それは畢竟幻視幻聽に過ぎないから信するに足りない」と云ふ人があるかも知れません。

然し阿彌陀佛の光は太陽や電燈の光線見たやうなものではありません。科學で取扱ひ得る物質的なものではありません。

精神的な「明るさ」です。明かさです。喜びです。苦しみの氷のとける温かさです。

また阿彌陀佛の說法は空氣に作用する音響ではありません。肉體の鼓膜をたたく振動ではありません。信仰の心に響く「導き」です。感激です。感謝です。悪い氣持の直されて行く命の泉です。

だから信仰なき世界で見得るものでもなく、聽き得るものでもありません。信仰圈内のものです。

現在佛の力

念佛即ち廣義
の見佛

光線や音響だつて空氣の圈内のもので、空氣があつて初めて現象して居るではありませんか。念佛の信仰を通して初めて見得るものです。信仰の念佛を通して初めて聴き得るものです。しかも信する者に取つては唯一無二の「力」です。「命」です。「規準」です。そして「喜びの泉」です。過去の佛では本當の信仰にはなりません。未來の佛でも本當の信仰にはなりません。イヤ、信仰にはなるかも知れませんが、畢竟部分的のものです。全生活、全生命を指導しては呉れませんか。

やるせない追恩か、はかない憧憬か、さもなければ功利的な祈りでしかありません。現在の全生活を指導して呉れる力。それは「現在説法の佛」より外にある譯がありません。だから「昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀」と云ふ言葉さへあるくらゐです。

現在見佛と臨終來迎

既に信仰に依て如來の光明を感じ、如來の説法を感じ得て居るならば、心眼に如來を見て居るものであります。人間的な姿ではないにしても何かしら如來の姿を感じて居るものであります。

何んな人でも「南無阿彌陀佛」と唱へる限り、其人の信仰の程度に應じて如來を感じ得る筈です。「茶碗」と云へば茶碗の姿が目に見え、如來と云へば「如來の姿」が目に見え、如來への信仰の程度に依て、心に然し茶碗に對する認識の如何に依て目に見え、茶碗が色々違ふやうに、如來への信仰の程度に依て、心に浮ぶ「如來の相」に異りがあるのは止むを得ないことです。でも、濃いか薄いか、深いか浅いか、有相か無相か、小さいか大きい、色々な別はありませうとも、心に浮ぶこと其事は既に「見佛」であり「值遇佛」であります。

見佛即ち聞法

觀無量壽經には

「あなた方が心に阿彌陀佛を想ふとき阿彌陀佛はあなた方の心の中に入つて下さる」

と云つて居りますが、

「佛を見、法を聞いて、速かに無生に入りたい」

と云ふ言葉もありますやうに、法を聞くことは佛を見て居ること、佛を見て居ることは法を聞いて居ることです。

随つて信仰が深くなれば、佛敎の目的の一である「無生」と云ふ「不死」の確證し得ることにもなります。して見れば、此の「無生」を得ること、即ち「無生忍」は、また「無生の生」としての「往生」を意味しますから、法然上人の云はれた「一念に一度の往生をあて置き給へる願なれば、念毎に往生する」と云ふ深い認識も自覺の上に上つて来る譯です。

然し一般的には「感應道交」の感度が低いから、平生護念の意識を、廣い意味での「見佛」とし、臨終のやうな非常に緊張した時の「見佛」を特に「來迎」と云ふ言葉で云ひ現はして居るのでありませう。

文字で見ますと「來迎」とは「來り迎へる」ことであります。そして何處へ來り何處へ迎へるか云へば如來が私共の前に來り給うて「如來の淨土」に御迎へ下さるのに決まつて居りますから、此時は「見佛」と「往生」とは一つになつて居ります。だから内容的に申しますと

「見佛」——見佛聞法

「來迎」——見佛往生

と區別されて居ると思ひます。切實して云へば、至心に念佛する瞬間は、自覺があるないの差はありませんとも、平生も臨終もなく、見佛——來迎——往生

臨終と來迎不
來迎

と云ふ具合に、凡てが同じ價值を持つて居ると思ひます。

然るに世には「臨終正念」「臨終來迎」を願ふのはまだ「信仰の不徹底」たるをまぬかれなないと云ふ議論もありまして、臨終必ずしも「來迎」を要しないと申しますが、それでは一體「如來様」は「十萬億」の遠方に居て、私達の臨終には目もかけて下さらないのかと疑ひたくなります。

況して信の上には「去此不遠」即ち距りはないのであり「憶念の心絶えざる」ものですから、臨終の時だけ「不來迎」即ち「不見佛」と云ふのは少し變であります。

それは屹度平生の信仰生活をそつちのけにして、唯だひたすら「臨終の正念」をのみ問題にして居る人達への「反對論」ではないかと想像します。随つて兩方とも少し偏り過ぎて居る信仰だと思ひます。

法然上人が太胡の太郎へつかはされた御手紙の中には

「臨終に必ず佛は來迎し給ふべし。然るにさきの念佛を空しく思ひなして、よしなく臨終正念をのみ祈る人などの候はゆゝしき僻胤に入りたる事にて候。されば佛の本願を信ぜん人は、かねて臨終を疑ふ心あるべからず、唯だ當時申さん念佛をば、いよく至心に申すべきにて候」とあります。これでハッキリ兩方の考へに對する解決が與へられて居ます。

釋尊の知見への隨順

全分の他受用

佛身に「自受用心」と「他受用心」との兩面があると申して居ますが、自受用とは自分に對することであり、他受用とは社會に對することです。人間心理として此の兩面があつてもよいと一應云はれ得ますけれども、既に「慈悲」を心とする「佛」であつて見れば、自身の一切を社會に捧げようとする「全分の利他」でなくてはなりません。

出世の理由

だから「釋迦牟尼佛」は「佛」たる責任を果たす意味に於て、法華經には「一大事因縁」を以て世に出られたのだと云ひ、無量壽經には「無盡の大悲を以て三界を矜哀するが所以に世に」出興したのだと云つて居ます。

即ち「一大事因縁」とは私達をして「佛知見」を「開示悟入」せしむるにある、即ち「佛」たらしむるにある譯ですが、それは「大慈悲」を以て私達を「矜哀」し給ふからで、茲に其實現法として「成佛法」と「往生法」とが開顯されました譯ですが、第六十一世の天台座主にまで推された程の顯眞法印が、凡ての官職をなげうつて、大原の勝林院にとちこもり、四十三歳から十四年も先輩の永辨法印と一緒に、研究に研究を重ねましたものの、實際問題として「成佛」する確信に達することが出來ず、法然上人に遇つて上人から「成佛は難しと雖も往生は得易し」

と云はれたのが動機となつて、遂に淨土教の研究をして「念佛門」に歸せざるを得なかつたやうに、専門的修養をして居る人でさへ「成佛法」は理論としては成立しても、嘗て實現し得た人は一人もなく、結局實現可能である「往生法」のみが、やがて「一大事因縁」の知見を開悟する實際法なのであります。

ですから釋尊の「三界を哀れむ」廣い大悲の「本意」としては、凡ての人に通する「往生法」を以て「生死の海を渡つて涅槃の岸に至る」近道とせられた譯です。妙樂大師も

「諸經讚する所、多く彌陀に在り。故に西方を以て一准とす」

と云はれたやうに、法華經の中にさへ「女人救済」を「阿彌陀佛の淨土へ往生する」こととして説かれて居る位であります。

だから釋尊も「往生法」たる萬人救済法の念佛を信する人に對して「善哉、善哉」と御喜びにならない筈はないでせう。

諸佛の歡喜

諸佛の讚美

かの「楞伽經」の「諸佛は阿彌陀の淨土から出る」と云つて居るやうに、そして「阿彌陀經」の「六方の諸佛は皆な阿彌陀の功德を稱讃して居る」と云つて居るやうに、諸佛と阿彌陀佛とは切つても切れない關係にありますし、また理論的にも實際的にも「阿彌陀」を得ることが「佛」たる所以であつて見れば、念佛に依て「阿彌陀」に融合し統一されて「阿彌陀の淨土」に生まれんとする私達の信仰に對して、諸佛が御悦びにならない筈もなく、諸佛が護念して下さらない筈もありません。

法然上人は「淨土宗略抄」と云ふのに

「彌陀の本願をふかく信じて、念佛して往生を願ふ人をば、彌陀佛よりはじめ奉りて、十方の諸佛菩薩、觀音勢至無數の菩薩、この人を圍繞して、行住坐臥、よるひるをもきはらず、影の如くに添ひて、もろもろの横惱をなす惡鬼惡神のたよりを拂ひ除き給ひて、現世にはよこさまなるわづらひなく、安穩にして、命終の時は極樂世界にむかへ給ふなり」

と云つて居られますが、私達としても私達の念佛に親しむことを諸佛諸菩薩が歡喜し給うて、影の形に添ふごとく、常に守護し給ひ一切の災難を或は拂ひ或は軽くさせて下さつて居るかと思へば、何んなに氣安く嬉しいか判りません。

かう段々味はつて來ますと、此の「小消息」は「一枚起請文」と違つて、誠に法然上人御自身の感情をグングンお出しになつて居ることに氣が付きまします。

「小消息」は最初から私達の感情に訴へられて居るのでした。

即ち始めには四種の疑團を拂つて居りますが、之を見た「黒田の上人」は何んなに喜んだ事でせう。私

法悦の高調

達と雖も疑ひを解かれた喜びを感じます。

次には一切の條件なくして救はれ行く喜びを述べて居られますが、嚴肅な修行をしなければ「解脱」されないと思ひ込んで居た人々は、之を聞いて何んなに喜んだでせう。かの熊谷次郎直實は上人から

「罪の輕重などは問題ではありません。唯だ念佛すれば救はれるのです。念佛以外には何の條件も要りません」と聞き、あの太の荒くれ男が、手ばなしで泣き出したと云ふではありませんか。

最易最勝の法を與へられた私達もまた喜ばずには居られません。

第三段に至つては、非常に困難である五通りの難關を突破し得る喜びを述べて「悦びの中の悦びだ」と、御自身の感情を吐露して居られますが、其次ぎには「罪人も生れるのだ」「一念でも生れるのだ」との喜びに感謝して、一層信仰生活を強化し淨化して行くべき氣持を發表して居られますあたり、いよく感情が高調して居ります。そして今は更にその湧き上り躍り上つて來る喜びの感情を、阿彌陀と釋迦牟尼佛と諸佛との、私達への化者と教者と證明者と三つに結びつけて表現して居られます。

法然上人の法語はかなり澤山ありますが、かうまで疊みかけて、喜びの感情を言ひ現はされたのは少いやうです。それだけにまた私達は此「小消息」に對して大きな感激を覺えるのであります。

今ま此一節を讀むとき、私達が現に釋尊の「出世の本懷」たる念佛信仰の教へに従ひ、一切諸佛の證明に應じて、阿彌陀佛への「至誠」と「深信」とを運び得て居ることは、法然上人の仰しやつて居る通り正しく「三佛」の御意志に添ふことであり、其事がやがてまた「三佛」の御微笑を増し奉ることであり、そしてそれがまた私達自らの法悦を増大して行くことでもあるかと思ふと、一層喜びを深く致します。

「佛の歡喜に應同するもの」

それは獨り私達の至純なる「念佛」の中に於てのみ有り得る信仰事實です。(續)

編輯後記

◇一年振りで二人組編輯の方法に従ふこととなり表面に引つ張りだされた譯であるが、勝手な用ばかり出来て思ふやうに働けず、他の方々に大へん御迷惑をかけてしまった。

◇しかしどうやら一通りの編輯を終へて、一本のバツトで、いま疲れをやすめてゐるところ。

◇季節もいよいよ本格的の梅雨に入り、毎日鬱陶しい空と睨めっこしてゐる。毎年この時候になると社會全般がその暗黒面ばかりを曝けだすやうだ。澤山の悲話哀話が生まれて来る。それらもみんな宿命から、と云つてしまへばそれまでだらうが、然し人間の無智、暗愚の問題の方が遙かに現實的だ。

◇みんなが明るい生活を希つてゐる。無智や暗愚から生まれる

悲惨な人生を忘れた明るさ！さういふ明るさは學問ばかりをいくら積んでもやつて来ない。

◇人間同士、お互がもつと手と手合つて慈しみあひながら歩きたいものだ。

◇明るさは信仰の生活から。誰にも分つてゐる、それを實行さへすればいいのだ。(X)

◇いよいよ夏が来た。強い太陽の光をうけ自然は生き／＼として来た。山も海も夏になつて始めて輝く。強烈な光輝にうちかつ自然の姿は素晴らしい。

◇今月はお盆の月である。お盆は全くわれ／＼の日常生活に喰ひ入つて平常の肉體の一部になつてしまつた。この際、われわれは「これでいいのか！」と云ふ反省を一應先づ持たねばならぬ。その意味で「お盆と家庭」の問合せは意義あることと思ふ。

◇漠然とした不安、いろ／＼の形

をとつて生活の上に日々擴り、大きくなつてゆく不安の聲を聞く。

と同時に、宗教を求める誠實な聲をも聞く。よりどころのない氣持を何か大きな力によつて温かくつゝまされたい、と云ふ正しい欲求がわく。この時、「淨土」の責任の重さと、心のはげみを痛感する。

◇詩人佐藤惣之助氏から隨筆をいただいた。單に夏の讀物として海を語つてゐるのではなく、海を生活の上になくはならぬものとしてゐるところに氏の面目があり多くの暗示が含まれてゐると、思ふ。

◇夏は太陽のもとに健康をとりもどす季節である。諸賢の健康を祈る。(Y)

◇多分御失念の事と存じますが、本年度分會費未納の方がございますから、何卒御納め下さいませ。様との代理部からの言傳がありました。

淨土 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年六月二十日印刷納本
昭和三年七月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順

發行人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替 東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば「淨土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

！峰高最の書用教布！をれこはに盆お

法然上人
鑽仰會編

念佛讀本

淨土信仰の全般を親切丁寧に説いたのが本書です。執筆者は教界の第一線に活躍する古豪・新進、當代宗教戦線の最前線に立つべき好個の教化書物です。

先きに「淨土」特輯號として好評を博し、諸方面の御要求に應じてこの度、裝を新たに單行本として再版を見た次第です。

内 容

生	中村辨康
死	佐藤賢順
佛	大野法道
本願	眞野正順
信と行	石井教道
念佛の集ひ	笹本戒淨
社會生活	島野禎祥
女性	江藤徵英
家庭生活	佐藤春夫
念佛の意義	椎尾辨匡

菊判一二頁、オフセット表紙付
本文五號總ふり假名付

定價 二十三錢(送料共)

講 話 一枚起請文

法然上人の「一枚起請文」が淨土宗教の精髓を盡したものであるのは今更不言を要しませぬ。この簡潔流麗な御一文の中に籠る本當の信仰精神を著者の豊富な體驗と該博な智識に基いて、易しく詳はしく説いたもので、これによつて毎日皆様がお讀みになる「一枚起請文」の正しい意味が、生活に即して、はつきりと解ります。目下非常な好評で、寺院、諸團體から布教用、教化用として多數の注文に接してをります。

多部數購入者への特典

團體、個人を問はず本書を一時に十部以上御購入御希望の向には一割引(九錢)とし、送料は當方にて負擔します。但し代金引換郵便はお断り申します。切手代用は一割増しに願ひます。

發行所 法然上人鑽仰會
振替東京八二一八七

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十二年六月廿日印刷納本 昭和十二年七月一日發行

淨土第三卷 第七號

定價金十錢(送料一錢)